

2007 年度 JAIS 年次大会において行った模擬法廷のデータ分析

コミュニティー通訳分科会 法廷言語分析チーム

(文責：水野 真木子)

2007 年度 JAIS 年次大会で行った通訳付き模擬裁判から得られたデータを、法廷言語分析チームのメンバーが個々の切り口から分析し、それをコミュニティー通訳分科会会合（2008 年 3 月 29 日、名古屋国際センター）でそれぞれ発表した。また、2008 年 8 月 4 日から 7 日にかけて開催された第 18 回 FIT 世界大会にチームとして参加し、時間的制約から一部のみではあったが、この模擬裁判のデータ分析の結果を発表した。（口頭発表：中村幸子 参加：水野真木子、浅野輝子、吉田理加）

以下、3 月の分科会会合での発表の骨子を紹介する。中村幸子、吉田理加については、それぞれの分析結果を個々に論文として執筆しており、本学会誌上で発表しているの、短い内容の紹介のみとした。

言語間に存在する文化差をどう訳出するか

毛利 雅子

(南山短期大学)

今回の発表は模擬法廷からの考察として、言語間に存在する文化差の訳出に集約して検討した。司法通訳人には、正確性・等価性が求められる。さらに、通訳人は中立の立場でなければならない。また訳出に際して、追加、補足説明、省略はしてはならないというのが一般的見解であるが、通訳は単なる言語の置き換えではなく、言語に付随する文化間の架け橋もしくはコミュニケーターであることも伴う。よって、外国人が被告人・証人であることの多い法廷通訳では、文化差を意識しない訳出は被告人に不利になる場合も考えられる。これを鑑み、逐語レベルの訳出のみが要求され、その背後の文化にまで意識されることの少ない法廷で、言語間の文化差も含んだ等価性の可能性について検証を行った。

その結果、対応言語とそれに伴う文化の正確性・等価性も通訳するため必要だと考えられるのは、(1) 外国語による発言のレジスターをどのように日本語で維持するか、(2) 文化差を埋める追加説明や文脈からの訳出をどう処理するか、(3) 言語間で同等に存在するとは限らないスラングをどう処理するかという 3 点であった。単に逐語的な訳出ではなく、言語に存在する文化差を埋めることも正確性・等価性の一部を形成すると発表者は考えるが、その必要条件は法廷に存在するのか、またどのような条件下なら可能なのか、もしくはそれを実行すべきなのか、などまだまだ検討課題があることを論じた。

ネイティブスピーカーに於ける構文及び語彙選択に関する Intelligibility (分かりやすさ)

浅野 輝子

(名古屋外国語大学)

英語のネイティブスピーカーによって選択された構文上及び語彙上の問題点について今回、行われた模擬裁判における外国人証人の発話を例に上げ、発話の intelligibility について考察したい。

Witness: Well, I didn't actually see whether he took the knife or not, but it didn't seem like anyone got knifed on purpose.

今回の模擬裁判における証人尋問については、上記の部分が最も有罪無罪を決める重要な部分と思われるが、パイロットリサーチの被験者、模擬裁判の通訳者ともにこの部分を正確に通訳できなかった。この誤訳を導いた要因と思われる英日の構文上の違いに関して言及したい。また、Smith (2003)が提言しているように、英語のネイティブスピーカーが選択した慣用語句によって日本人の通訳者に対して unintelligibility を与えることになった要因について考察したい。

英文における代表的な難解表現法として否定辞繰り上げ文 “I didn't actually see...” “It didn't seem...” などがある。一方、日本人は通常 “I think...” “It seems...” のような肯定文で始めることが多い。この発話中の anyone という語彙は、ここでは（現場にいた誰もがすべて）という強調表現として用いられており、通常この後、否定文になることが多いが、この場合は否定文にはなっておらず、通訳者に分かりにくい表現となっている。全体として被告をかばうソフトで控えめな表現というネイティブ特有のディレクトではない表現法を用いているため、より一層分かりづらい文章となっている。

次に、got knifed という受身形の口語表現が使用されているが、ここでは「ナイフで刺された」という意味で使用されている。ネイティブとしては一般的な用語であるが、われわれ日本人は、knife を「ナイフで刺す」という動詞として使うことはあまりない。

ネイティブスピーカーの発話を訳す場合には、source language (起点言語) の intelligibility (明確性) が最も重要になってくる。特に、法廷通訳人が介在する外国人裁判においては、証人尋問における証言の分かりやすい表現法を引き出すことが、非常に重要になってくる。故に証人による発話においては、通訳人によって誤訳、訳漏れが生じやすい表現方法を避け、分かりやすい表現方法に言い直してもらうことが重要である。今後、日本人の通訳人、英語のネイティブの通訳人とノンネイティブの（通訳人）3者によって語彙、表現法についての意見交換機会を持つことが必要になってくるであろう。

[参考] Smith, L. (2003). English across Cultures, Paper presented at Workshop on World Englishes in the Classroom, Chukyo University.

“Semantic Picture”が通訳に及ぼす影響

水野 真木子
(金城学院大学)

通訳者の描く“Semantic Picture”という概念があるが、これは通訳者の思い込みや予断によって描かれるイメージのことである。模擬裁判では、そのような通訳者の“Semantic Picture”によって影響を受ける可能性が高いと思われる表現がいくつかあった。

例えば、検察官が使用した「店」という日本語は、模擬法廷の通訳者によって“the bar”あるいは“the restaurant”と訳されていたが、細かい内容を知らせずに被験者に訳してもらったパイロットスタディでは、「店」を“the shop”や“the store”のように訳したケースがあった。「店」の訳語として最初に頭に浮かんだ訳語が“shop”や“store”という、より一般的なものであったのは自然な現象である。一方で、“the place”というように、訳語を特定しないという方法を選んだ被験者もいた。これは、具体的な情報がないまま取りあえず訳しておかねばならないときに、通訳者が選択する1つの戦略である。これらとは対照的に、内容を知らされた模擬裁判の通訳人は、当然、前述したように、より正確な“the bar”あるいは“the restaurant”という訳語を選択している。ただし、“the bar”と“the restaurant”とでは必ずいふイメージが違うことから、2人の通訳人が描き出した“semantic picture”はかなり異なるものだったことが読み取れる。

もう一つの例は、“He had blood on him.”であるが、模擬裁判での通訳者は、「血が流れていました」や「血が出ていました」のような、実際に血を出している状況を示す訳をし、パイロットスタディの被験者も、全く同じ訳出をした。これは、「ナイフで刺された被害者」という概念が、最初から、通訳者の頭の中で実際に血を流しているというイメージを描いてしまったせいであると思われる。冷静に考えると、“He had blood on him.”は、近くにいる他の人間が血を流しており、それが付着したという状況も可能である。もし何の予断もなければ、普通は「彼には血がついていた」と訳するのが普通である。

このように、通訳者の予断とそれによって描かれる“semantic picture”により、法廷で提示される事実関係の伝達に歪みが生じる可能性があると思われる。

スラング交じりの証人質問模擬法廷における通訳の影響 —ポライトネス論から見た社会語用論的談話分析—

中村 幸子
(愛知学院大学)

欧米での規約等では通訳人は原発言のレジスターやニュアンスまで等価性を維持することが求められているが、現実には必ずしもそうならず、法廷通訳の理想と現実には乖離があると言われている。本模擬法廷で得られたデータの分析・考察により、被害者の発した卑語の

頻度と激しさの程度が原発言どおりに訳されなかったことよって発話内の力が弱まり、裁判員の心証形成に影響が及んだことが示唆された。対面通訳の場で何が通訳パフォーマンスに影響を与えるのかについて社会語用論的な観点から「ポライトネス論」(Brown & Levinson 1987)を援用して検討した。

法廷通訳人のフットイング

吉田 理加

(立教大学大学院 (S))

3月の分科会では、1) スラング交じりの証言の訳出と 2) 通訳人の聞き返しによって、証人が証言を繰り返した場面に焦点を合わせた分析を発表した。1) では、通訳人は、事件の動機を語るために重要な罵倒やののしり言葉が引用された証言の訳出にとまどい、かろうじて「おまえ」、「ばか野郎」という日本語訳を提供した以外は、多くの言い淀みや沈黙を繰り返した。その結果、日本語の訳出自体が、証言の信頼性や説得力が劣るとされるパワレス・スタイル(O'Barr, 1982)になった。また、2) では、証言が聞き取れなかった通訳人が、裁判官に許可を得て、証人に繰り返すよう依頼し、証人が証言を繰り返した。証人は、1回目の証言と比べて、ポーズが長く、ゆっくりと聞き取りやすい発音で繰り返した。1回目の証言では、けんか相手の罵り言葉がそのまま引用されていたが、2回目の証言では、罵り言葉は引用されず、証人の証言内容自体がよりソフトな発話に変遷した。このように、通訳人が介在することにより、原発言と訳出において、並びに、通訳人の聞き返しにより、原発言自体の証言スタイルに変遷が生じていることがわかった。

上を踏まえ、本稿への投稿論文では、Goffman (1981) のフットイングの概念を援用し、レジスターを保持した訳出を困難にしている要因を分析し、考察した。

模擬裁判 証人尋問シナリオ

【関係者】

被告人：アメリカ人 Dave 頑強

証人：カナダ人 Larry 肉体労働者、教育レベルは高くない。被告人とは飲み仲間で顔見知りなので、多少かばうような発言もみられる。

被害者：アメリカ人1 (椅子の男、刺された) Joe アメリカ人2 (ナイフの男、怪我) Max アメリカ人3 Bill。3人とも荒っぽい。相当酔っていた様子。

- 裁判官 では、開廷します。今日は、前回の証人尋問を続行します。証人、前へ。前回、宣誓していただきましたが、その効力は維持しますので、よろしくお願ひします。検察官、どうぞ。
- 検察官 前は、あなたが、被告人と知り合った経緯と当日その店に来るまでの経過などお尋ねしましたので、今日は事件についてお尋ねします。
- 証人 入り口に入って、カウンターで、ビールを受け取って、それから左手の奥にあるテーブルに行きました。
- 検察官 そのテーブルのところにはどれくらい居たのですか。
- 証人 タバコを吸ったり、ジョッキのビールをちょびちょび飲んでいました。たいした時間ではないです。
- 検察官 騒ぎに気がついたのはいつ頃ですか。
- 証人 えっと、確か、一杯目のジョッキを飲み終えた頃だったと思います。
- 検察官 まず、何がきっかけで騒ぎに気がついたのですか。
- 証人 カウンター越しに、Dave が向こう端に壁にもたれて座っているのが見えました。Dave に向かって誰かが大声で絡んでいるようでした。
- 検察官 その時の様子をもう少し詳しく説明してください。
- 証人 Dave の近くにいた一人が「この野郎、生意気だ、徹底的にやっつけてやる、思い知らせてやる、首の骨をへし折ってやる（その他の罵詈雑言）」などと、ろれつが回らない口調の大声で怒鳴りながら、椅子を振り上げて彼に殴りかかろうとしました。
- 検察官 それでどうなりましたか。
- 証人 もう一人の男がカウンターからナイフを取って、「ぶっ殺してやる」と叫びながら Dave を刺そうとしたんです。やばい、Dave が本当にやられてしまうかもしれないと思いました。
- 検察官 その時被告人はどうしましたか。
- 証人 Dave は、男の手を押さえて、必死に防ごうとしていました。
- 検察官 そして、どうしましたか？
- 証人 椅子を振り上げた男を防ごうとして、ナイフを持った男を手元に引き寄せました。その時、手を押さえられた男が、「やっちなえ、早く椅子で殴れ」と叫びました。
- 検察官 被告人はナイフを持った男の手を押さえたのですか。
- 証人 男を羽交い絞めにして、ナイフを持った手を押さえていました。男は「放せ、放せ」と叫んで暴れていました。
- 検察官 被告人が掴まえたのは右手ですか左手ですか。
- 証人 右手です。
- 検察官 ナイフを持っていた手ですね。
- 証人 はい。
- 検察官 手のどこを押さえていたのですか。
- 証人 腕のところですよ。

- 検察官 腕とは具体的にどこのことですか。
- 証人 ここです。(動作で示す。)
- 検察官 被告人はその男からナイフを取り上げようとしたのですか。
- 証人 え〜っと、取り上げようとしてもできないような感じです。
- 検察官 次にどうなりましたか。
- 証人 Dave はナイフの男を少し斜め前に押し出しながら、椅子を防いでいました。
- 検察官 次にどうなりましたか。
- 証人 (彼の)背中の影で見えなかったのですが、3人が折り重なるようにぶつかりました。
- 検察官 誰の背中ですか。
- 証人 椅子の男です。
- 検察官 折り重なるというと、みんなが床に倒れたのですか
- 証人 いえ。椅子の男が、ナイフの男を羽交い絞めにして腰を落としている Dave にぶつかるようになって、Dave の方もナイフの男の体を盾にして椅子を避けながら体をぶつけていったように見えました。
- 検察官 次に、何を見ましたか。
- 証人 血を流した人がカウンターの前をよろよろ歩いていました。
- 検察官 いきなり血を流した人がいたのですか。
- 証人はっと気づいたら、もうそこで人が血を出していました。
- 検察官 血を流していた男とは、誰ですか。
- 証人 椅子の男です。
- 検察官 血はどこから出ていたのですか。
- 証人 お腹の辺りです。
- 検察官 どの辺りか手で示してください。
- 証人 (手で「お腹」の辺りをさする。)
- 検察官 みぞおちの辺り、ふつう、おへそがある上ですね。
- 証人 はい。
- 検察官 そのとき、ナイフはどこにありましたか。
- 証人 Dave の手に握られていました。
- 検察官 あなたは被告人がナイフを持った男からナイフを取り上げて被害者を刺すところを見たのですか。
- 証人 えっと、取り上げたかどうかは、わかりません。刺すというより、ぶつかって刺さってしまったというような感じだったと思います。
- (尋問は続くがシナリオはここまで)